

---

# 仮面ライダー 'S

神崎はやて

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー , s

### 【コード】

N6919M

### 【作者名】

神崎はやて

### 【あらすじ】

この世界に、神なんていない。

それは、神の気まぐれか。残酷な運命の落とし子か。

突如地球上に現れた人類の進化系、オルフェノク。

その戦いは、とある不器用な青年と、とある一途な女達の戦いにより、その幕を下ろした。はずだった。

再び、大地に降り立つオルフェノク。

その時、人間達が見る世界とは

。

仮面ライダー555 x ガンダム00のクロス。よかったら見ていっ  
て下さい。

## プロローグ く神二代ワルモノく（前書き）

最初に。

これは新しい作品では有りません。

作者が妄想した作品案の、プロローグだけの代物です。

人気があれば連載化しようと思っています。

もし連載化してほしい場合は、感想にてその旨をお知らせ下さい。

20くらい票がきたら考えようか、な……………。

ちなみにタイトルですが……………仮面ライダーエプス、と読みます。

それでは、どつぞ。

## プロローグ く神二代ワルモノく

この世界に 神なんていない。

また1つ、全てを焼き尽くさんと飛び交う凶弾が、近くの建物に激突して派手に爆ぜる。

それを煤に汚れた顔で横目ににらみつけ、少年は駆けた。

仲間達が消し飛んでいく。

それは、雨のように降り注ぐ銃弾によるものばかりではない。

まるで鞭のように、しかしそれとは違い明確な意思を以って蠢き、迫り来る灰色の触手が、仲間達の胸を貫き、心臓を刺し貫き、ただの灰燼へと変えていく。

だが、そちらに目をやっている暇などない。

振り向くな。

前を見る。

自分を射殺さんとする相手を見据える。

その殺気で、相手の喉笛へ噛み付いて見せる。

そう己へ叱咤し、手に持った銃を構え、少年は駆けた。

機関銃が派手に火を吹いた。

それは目の前で蠢く灰色の異形  
人類を遥かに超越したと  
驕っているそれに、スパークを上げて着弾した。

仰け反る人の形をしながら  
決して人とは相容れない、異  
形たち。

だが。

少年の足掻きを嘲笑うように、灰色の異形は少したたらを踏んだだけ  
けで、持ちこたえていた。

その様子に見出せるのは、もはや絶望しかない。

弾が切れたのだ。

戦い詰めであった少年の懐には、最後の悪あがきに使った鉛弾一発と  
て残ってはいなかった。

(ここまでか……………)

少年は、諦めたように銃を降ろした。

それは、降参の証。

それに気付いた異形が、その無機質な顔ににやりと笑みを浮かべた  
ような気がして、少年は悔しさに歯噛みした。

(やはり……………この世界に神はいないのか)

少年は天を仰いだ。

せめて、天に昇れたその時は、本当の神に出会えることを願って。  
だが。

「ぐあああああああつ！」

天は、少年をそう簡単に迎え入れてはくれなかったようだ。

紅い円錐状の光芒が次々に異形達を捕らえ、その体躯を貫いて灰燼へと変えていく。

何が起こったのか解らない。

まさしく、一瞬のうちの出来事だった。

しかし、見開かれた少年の視線は、崩れ行く異形達には向けられていなかった。

彼の視線を射止めていたもの。

それは。

「……………ファイズ」

ゆっくりと振り返る黒き英雄を、少年はまるで神が降臨したかのよ  
うな眼差しで見つめていた。



ブログ く神二代ワルモノく（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。

お試し版なので、今回はこれまでです。

とりあえず、第1話までは投稿したいと思っています。  
その続きを見たい場合は、感想まで。

それでは。

## 第01話「破壊の始まり」

ファイズが人類を救い、真に世界の救世主となって数年。

人々とオルフェノク達は未だに完全に歩み寄ることも出来ず、大きな戦いこそなけれど、小競り合いが続いていた。

そんな状況に業を煮やしたのが、オルフェノク達の総本山、スマー  
トブレイン。

彼らは人間達に攻勢をかけるべく、新たな戦闘システム  
ライダーズギアの開発に乗り出した。

そして。

今日この日、その試作機のテスト演習が行われることになっていた。

9

だが、彼らはまだ知らない。

この日こそ、彼らにとって 否、人間にとってもまた、再

び世界を2つに分かつ、運命の日となるのだということ。

## スマートブレイン性能実験場

まるでドームのようになっていてそこには現在、たくさんの人間の姿があった。

否、正確に言えば、彼らは人間ではない。

人間の姿をした異

オルフェノクである。

彼らは皆、スマートブレインの社員。

今日、記念すべきこの日、新たなライダーズギアの試運転を兼ねた演習が行われるのである。

ライダーズギア。

かつてスマートブレインが開発した、オルフェノク用の戦闘システム。

様々なタイプのギアが製作されたが、今や彼らスマートブレインに残されているのは、使われることなく保管されていたデルタギア、そして一般兵士用に量産されたライオトルーパーの持つベルトのみとなってしまうた。

対し人間側には、最大の敵であるファイズギア。

カイザギアは大戦終盤に消失してしまっただけだが、ファイズギア1つでも十分に脅威になり得る。

だから、開発したのだ。

嘗て所持しており、敗れた2本の帝王のベルト。

それを上回る力を持った、新たなベルトを。

今日は、その試作品の演習があるのだ。

今群集の視線は全て、スタジアムの中心に向けられている。

そこには1人の色白で赤髪を存分に跳ねさせた青年が、1人静かに。

「おらっ、お前ら！ この大天才、パトリック＝コーラサワの活躍！ 存分に見て行きやがれ！」

否、かなり騒々しく周囲に手など振りながら、立っていた。

そして。

ブーッ、ブーッ。

「おっ

演習開始のブザーが鳴り、スタジアムの観客席の照明が落ちる。

必然的に、パトリックの立っている場所のみが、まるでスポットライトが当たっているかのように照らし出された。

同時に、目の前に複数の機銃が現れた。

機銃の下には、的となる円盤。

機銃を回避し、上手く的に当てることこそが、この演習の内容である。

「へっ、やってやろっじゃねえか。変身！」

パトリックは得意げににやりと笑うと、ベルトのバックル部分に垂直になるように立てられた、翡翠色の装飾を倒した。

『COMPLETE』

機械音声が発せられ、パトリックの身体が光に包まれる。

次の瞬間、パトリックがいた場所には、別の『何か』が立っていた。

緑色の機械的な細身。

背部には飛行機の翼のようなウイングが取り付けられ、右手には、まるでその体躯と一体化しているような、翡翠色のライフルが備わっていた。

言うなれば、まるでロボットののような外見だ。

「うっしやあ、行くぜっ！」

顔の部分の黒いカメラアイが発光すると、パトリックの声が響く。

機銃から銃弾が発射された。

パトリックの声を発するロボットは、それを紙一重でかわしつつ、反撃とばかりにライフルを連射した。

それは標的を見紛うことなく、機銃の下に備え付けられた的へと吸い込まれていき

命中する。

それを観客席で見ていたスマートブレインの重役達が口々に感嘆の声を上げる中、2人の、まだ青年と呼べるであろう男が興味深げに見つめていた。

しかし、彼らが向ける興味とは、周囲にいる重役達のそれとは少々違っていた。

「あれが、スマートブレインの最新鋭ライダーズギアか」

その内の1人、金髪の青年は不敵な笑みを浮かべてそれを見やる。

すると、そうだね、と言って隣の、茶の髪を後ろで結んだ、白衣を着た青年は答える。

「ライオトルーパーの発展型、イナクト。量産はまだだけど、先行して量産されている、ヘリオンよりは幾分かは性能良さそうだねえ」

視線を金髪の青年に向けぬまま、茶髪の青年は自らのパソコンのディスプレイにのみ集中し、驚異的な速度でキーを叩いてく。

「なるほど。それでこれほどまでにそうそうたる顔ぶれが揃っているというわけか……」

「気になるかい？」

「まさか。あくまで私はユニオンの兵だ。他社の薄汚れた狸などに興味はないさ。……尤も、あの機体だけは別だがね」

「言つと思つたよ」

獲物を見つけたような顔でイナクトをその目に捉えてそう言う金髪の青年に、茶髪の青年は苦笑いで答えた。

スマートブレインの帝王のベルトがファイズに負けてから数年。

変化が起こったのは、何も人間とオルフェノクの関係だけではない。

それまで、1つに纏まっていたスマートブレインが2つの組織に分裂するという、大事件が起こっていたのだ。

1つは、村上前社長を慕っていた多くの社員が取りまとめた、A E U。

そしてもう1つは、彼のさらにも、全てのオルフェノクを統べるといわれている『王』が支配する、ユニオン。

この演習はA E Uのそれであり、彼ら2人はユニオンからその同行を探るべく送り込まれたのである。

言うなれば、産業スパイだ。

「さて、そろそろ上に報告する時間だな」

そう言って、金髪の青年は自身の携帯を懐から取り出す。

しかし。

「むっ」

「どうかしたのかい、グラハム？」

茶髪の青年が訝しげにそれを見ると。

「……………カタギリ、私の携帯は壊れてしまったのだろうか？」

「どれどれ？……………別にどこもおかしくなさそうだけどね」

茶髪の青年                   カタギリは一旦パソコンを閉じると、金髪の青年、グラハムの携帯を弄る。

別段、どこもおかしいところは見受けられなかった。

圏外、と表示されていること以外は。

だが、それは本来はありえないことだ。

2人の持っているものは特別性で、通信はよほどのことがない限りは通じるようになってる。

それが通じないということは                   。

「どうやら、五月蠅い蠅が一匹、紛れ込んでいるようだな」

「そのようだね」

2人は、辺りを見回す。

どこかで通信妨害を受けているのであれば、こちらの行動が読まれていたということ。

それならば、通信妨害を行っている人員を押さえて、早く本部と連絡を取らねばならない。

だが。

「様子がおかしくないかい？」

「ああ。まるで、この状況を予測していなかったようだ……」

よく見れば、自分達以外にも多数の者達が、自身の通信機を片手に何やらざわめいているのが見える。

すると。

「なんだ、この音は？」

喧騒の中で微かにだが、何か走る駆動音のような音が聞こえてくるのが解る。

これでも耳はいい方だ。まず間違いないだろう。

「カタギリ」

グラハムも気付いたようだ。

その音は段々と大きくなっていき、そして。

「あれは!?!」

1台のバイクが、スタジアムの入り口から勢いよく躍り出た。

そしてその上には、イナクトに似ているが、しかしなんとなく似つかない、ロボットが立っていた。

「あん？」

イナクトが声を上げる。

しかし、突如現れたロボットは、一言も発さず、ただその空色のカメライを向けるのみ。

白を基調とした四肢に、青を基調とした胴。

右腕には巨大な剣がマウントされており、頭部では特徴的な触覚が綺麗な直線を描いてV字を形成している。

「粒子散布、完了。ファーストフェイズを開始する」

「はっ、お前どこの機体だ？ 人革連か？ ユニオンか？ この俺パトリック⇨コーラサワーと知っててやってるのかよ？ AEUのパトリック⇨コーラサワーだ。模擬戦でも負け知らずの、スペシャル様なんだよ！」

吠えるイナクトに対し、相変わらず黙して全く動かない正体不明機。

「だんまりかよ。ま、何にせよ、人様の敷地に土足で踏み込んだんだ……………」

イナクトは、腰からプラズマソードを取り出した。

腰のバックルからミッションメモリーと呼ばれる、メモリーカードを抜き取ると、ソードの柄に装填する。

『READY』

機械音声が発せられ、青白く輝く刀身が出現する。

それにも身じろぎすることなく、正体不明のロボットも、同様にミッションメモリーを引き抜き、右腕にマウントされた大剣の根元部分に装填した。

『READY』

後方に折り畳まるようになっていた大剣が前面にシフトし、大剣が完成する。

「ただで済むわけねえよなあ！」

イナクトがプラズマソードを手に、正体不明機に突撃をかけようとする。

しかし。

ガキーン！

「なっ……………！」

大剣にプラズマソードが弾かれ、空しく宙を舞う。

正体不明樹は反撃の隙を与えることなく、

「俺は、」

袈裟懸けに振り下ろし、

「スペシャルで、」

逆袈裟より振り払い、

「2000回で、」

大上段から振り下ろした。

「模擬戦なんだよおおおおおおお！」

もはや意味不明となったその言葉を悔しげな叫びと化すその男を見下ろし、正体不明機は静かに言い放った。

「……………ファーストフェイズ、終了。セカンドフェイズへ移行する」

## 第01話「破壊の始まり」（後書き）

どうも、神崎です。

くまたいよう様より、こんな短いのでは判断できない！という指摘をいただきましたので、連載作品として再度試験投稿させていただきました。

まずはこれを見て雰囲気を読んでいただき、改めてこの続きが読みたいか、というのをご判断いただければと思います。その旨は感想板までどうぞ。

それと、先日の後書きの件に関しましては、今後2度とそのようなことがないよう努めて参りますので、今後とも神崎の作品をお願い申し上げます。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6919m/>

---

仮面ライダー 's

2010年10月10日11時52分発行